井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて㉛

江津市嘉久志町で井戸公碑を再建

大田町　石賀　了

昨年の12月18日、山陰中央新報を読んでいると、石見版トップの「芋代官の顕彰碑再建」の３段抜きの大きな見出しが飛び込んできた。読んでみると、江津市嘉久志町で地域住民の皆さんが井戸公碑を再建したという記事で、「またしても江津市か、すごい」と感慨深く読んだ。

▷再建された「嘉恵碑」と小林、田中、堤の３氏（左から）

というのも、井戸公碑の全体の数は約５百。墓石型と自然石型があるが、墓石型の多くは福光石など軟らかい石のため傷みが早く、百年も持たずに石が剥落するなどして文字が読めなくなることが多い。しかし、石碑が傷んだからといってそれを再建する動きにはなかなかつながらないものだ。

ところが、江津市では、私が知っているだけでも再建または再整備されたものはこれで３基目。清見町の「泰雲院殿義岳良忠居士」碑、和木町の「慶遺澤」碑に続いてのことだ。早速、記事にあった再建委員会の田中睦次会長（76）に連絡し、お話を聞くことができた。

△元の「嘉恵碑」（宮本豊氏撮影）

元の碑は、岩根神社の参道入口にあり（以前は別の場所にあったらしい）、墓石型で、台石が３段組まれ、その上に猫足つきの碑石が乗る、総高さ３メートル５センチの大きなもの。一番上の碑石は幅58・５センチ、高さ155センチもあったので、猫足がこの大きな碑石を支えきれず崩壊してしまい、碑石をロープで固定していた。明治４年に再建されたとあるので、２代目のこの碑は148年の歴史を刻んで３代目にバトンタッチされた。

「何とかしなければ」という声が町内で上がり始め、昨年５月に有志10人で再建委員会を設立。25年間民生児童委員として地域のお世話をしていた田中さんが会長に推された。

浄財集めは、町内全戸に趣意書を配布したほか、町内の企業、町出身者などにもお願いし、75万円が寄せられた。「いつまでもしっかりと立っている石碑にしたい」という再建委の皆さんの思いがあり、碑石は丈夫な自然石にして、基礎となる土台は鉄筋を入れて頑丈なものにした。とても予算内では収まらなかったが、石材店さんと左官さんに「本当に無理を言いました」と半ば反省の言葉も聞かれたほど、立派な石碑ができた。

完成した３代目は、自然石の碑石の下にこちらも鉄筋を入れて丈夫にした白御影石の台石を乗せた。そこには元の碑に刻まれていた「村中みんなの力を合わせて」という意味の「村中」の文字を入れ、碑石の「嘉恵碑」の文字は２代目の文字の拓本を取って同じ文字にするというこだわりようだ。総高さは176センチと、２代目と比べると小さいが、それでも堂々たるものだ。

12月13日にあった除幕式には寄付をした皆さんや町民、約30人が出席。岩根神社の宮司さんの祝詞の後、自分たちでついた紅白の餅を配って祝った。

「『芋代官』と親しんできた碑を再建することができて安心した。『嘉恵』の文字は井戸公の遺徳を表す文字だが、嘉久志の皆さんには『嘉久志に恵みをもたらす』という意味でも親しまれている。再建できたのは協力していただいた皆さんのおかげ。先人の熱い思いをこれからも伝えていきたい」と田中会長。

お話は嘉久志地域コミュニティセンターで堤正博センター長（70）、再建委の事務局兼会計の小林慎宣さん（69）と一緒に聞かせてもらったが、嘉久志では近くの公園の再生プロジェクトも若手の人たちの力で進んでいると言い、行政に頼らない自主独立のまちづくりの気風が、井戸公碑の再建にもつながったのだろう。

新しい井戸公碑の前には、新年度、まちづくり推進協議会によって幅１・２メートルもある説明板も建設されることになっている。

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて㉜

頌徳碑調査で新たな碑の発見も次々

大田町　石賀　了

2ページで紹介しているように、今年度、当協会では「いも代官・井戸平左衛門頌徳碑調査事業」を行っている。

これまで、井戸公碑の総数は大田市川合町の故宮本豊さんの個人的な調査結果による490基という数が、さまざまな場面で紹介されてきた。宮本さんのほかには調査をした機関はないので、この調査は貴重なものだ。

その宮本さんの資料を基に井戸公碑を調査、取材しているうちに、「もっとほかにあるかもしれない」と考えるようになり、公的な機関がこれまで調査をしていないことに不満を持ったりしていた。手始めとして、中国5県の市町村教育委員会と、神社、寺院を訪ねて歩かなければ、と考えたが、実際に足を運ぶには数が多すぎ、時間も経費もかかりすぎる。そこで、まず郵便による照会をすることとし、石見銀山基金事業の助成を受けることで協会の負担を減らそうと考えた。ただ、同基金の助成も上限が30万円なので、神社と寺院は県内だけとし、旧大田市分は訪ねて歩こうと、対象から外した。

突然の「井戸公碑があるかどうか教えてください」という手紙にどれほどの返信があるか心配したが、発送した2日後から、毎日数十通の回答が返ってきて、事務局はうれしい悲鳴を上げることになった。7月2日現在で約43％も回答していただいた。

ほとんどの回答は予想通り「境内にも、近くにも碑はない」というものだったが、「お役に立てず申し訳ない」と断りの一言や、「すばらしい成果が上がることをお祈りする」「こうした調査は井戸公の遺徳の顕彰につながる」という、多くの励ましの言葉に勇気づけられた。

市町村ごとの一覧表も同封していたので、碑の刻字の違いや、所在地の違いを訂正していただいた方もあった。また、中には地域内を探して歩いて、地図や写真を同封してくださった方もあり、今後の調査の大きな力になる情報もたくさんいただいた。

もう一つ分かったのは、宮本さんの調査の正確さだ。考えられるあらゆる手を尽くして調査されたのだと思うと、改めて頭が下がる。個人による調査で制約も多かっただろうに、と思うとなおさらだ。

県内でも出雲部には少なく、松江市と出雲市の海岸部、飯南町にあるだけで、出雲部のほかの市町村には全くないとされていたが、今回の調査でもそのことは裏づけられた。

ただ、松江藩にないのは納得するとしても、山口県には何基かあるのではないかと期待したが、今のところ「0基」で、これは残念だった。だが、未回答がまだ約35％残っているので、少しの希望は持っていようと思う。

そんな中、「ありますよ」という、うれしい回答もあった。その中には、これまで旧松江市内には手角町に1基だけだったのが、福原町と邑生町にそれぞれ1基ずつあるという回答があり、これはうれしい発見だった。ただ、両町とも旧松江市の中心市街ではなく、美保関に近いことから、島根半島での頌徳碑建立の広がりとみることができる。

また、松江市八束町（大根島）には8つの地区があり、これまで7地区にしか井戸公碑が確認されていなかったが、波入という地区の全隆寺のご住職から波入にもあると情報をいただき、これで8つの地区全部に井戸公碑があることが分かった。

写真では松江市福原町、長慶寺の井戸公碑と、八束町波入の井戸公碑を紹介する。

ほかにも、江津市桜江町、浜田市三隅町、金城町などで未確認の井戸公碑が報告されているので、今後寄せられる回答も含めて、宮本調査との照合などを進め、調査結果を反映した全体の数をお知らせしたい。

▷新たに確認された松江市福原町、長慶寺の「泰雲院殿」碑（上）と同市八束町波入、お堂前の「泰雲院殿」碑

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて㉝

江津市桜江町では16基が20基に

大田町　石賀　了

前号でも紹介したが、今年度当協会では井戸公碑の調査事業を進めており、9月25日現在で47・31%、659件の回答が寄せられている。調査前には2基でも3基でもあれば大成功と考えていた新たな碑の報告は約30基にもなった。

大田市の小学生は3、4年生のときに社会科の副読本で井戸公のことを学ぶが、江津市でも副読本で栽培法を広めた人として江津市の青木秀清と石田初右衛門とともに「サツマイモの三恩人」として井戸公のことを学んでいる。

大田市川合町の故宮本豊さんの調査では、江津市桜江町の井戸公碑は16基となっているが、副読本には5基多い21基とある。今回、この5基がどこにあるのかもお尋ねしたところ、江津市教委の職員さんが現地調査をしてくださり、写真、地図とともに詳しい場所も教えていただいた。ただし、そのうちの1基は現在、浜田市旭町になるため、桜江町の井戸公碑は20基ということになる。

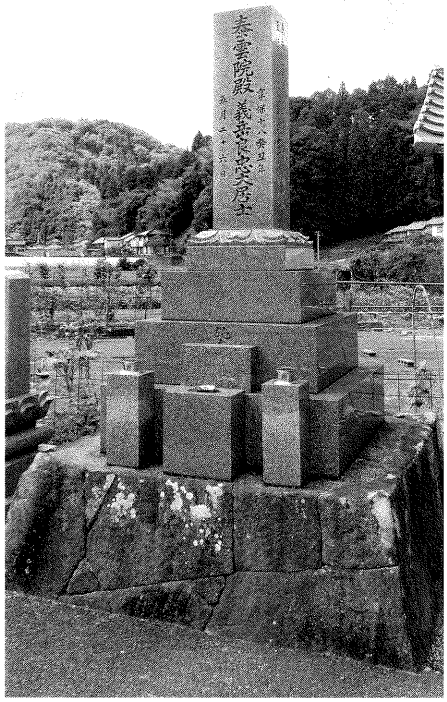
▷桜江町田津、正泉寺の井戸公碑。台石には「川越村大字田津中」とある

桜江町には平成16年発行の「次世代への贈り物／桜江の碑と野の仏」（桜江碑を探る会編）という冊子があるが、副読本に載っている桜江町田津の碑がこの冊子には載っていなかったため、職員さんが田津地域を歩いて、正泉寺の境内にあることも見つけてくださった。

また、県内の寺院に郵送した照会状に対して、正泉寺のご住職、平田俊円さんからも「境内にある」旨の回答をいただいたので、この碑を含め何基かの井戸公碑調査に桜江町を訪ねた。その中で1基、道路拡張に伴って再建され、今でも毎年供養が続いている碑があったので紹介する。

桜江町は江の川の両岸に広がる地域で、昔から江の川の氾濫に悩まされ、堤防のかさ上げなどが進んでいるが、今年7月13日から14日にかけても氾濫し、各地に被害が発生した。

谷住郷地域でも、過去には江の川に流れ込む小谷川が江の川とともに氾濫して地域は幾度となく被害を受けてきた。そのため、住宅地域を迂回する形で大規模な河川トンネルを建設して、江の川に合流させる大工事を行っており、今回の豪雨による被害はなかったという。



△再建された桜江町谷住郷の井戸公碑

地域から国道261号に出る県道の拡幅工事の際に再建されたのが、江の川から約500㍍の場所にある井戸公碑で、平成12年に御影石で再建された。初代の碑がいつ建ったのかは不明だが、宮本調査の写真では碑石の下部が剥落している。

新碑は初代とほぼ同じ大きさで建てられ、5段ある台石の最下部は水害に配慮したのか石組にして約50㌢かさ上げし、総高さは3㍍15㌢もある、見上げるほどの碑だ。

碑石には「泰雲院殿義岳良忠大居士」などの文字が初代と全く同じ内容で彫られ、「平成十二年再建」の文字と、近くの日笠寺の当時のご住職の「修復之讃」が加えられた

施主も初代の「住江組／谷組／入野組」の文字が彫られているが、現在は近くの天神郷の皆さんが管理され、毎年日笠寺のご住職を招いて供養をしている。去年までは供養の後、近くの集会所で皆さんが会食をしていたが、今年は新型コロナ感染症の拡大防止のため、碑の前で仏事だけが営まれたという。

この石碑も含め、桜江町には江の川沿いに建っている碑が多くあり、水害で水につかった碑があるのではないかと心配した。ところが、田畑が水没し、住宅の床上浸水もあったという川戸の小田地区にある井戸公碑も、碑の前の道路が少し高くなっているためか、水にはつからなかったと、近所の方から聞いた。江の川沿いで井戸公碑を建てた皆さんは、水害のことも考えながら場所を選定したのだろうかと思ったりした。

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて㉞

新たな碑を加えて井戸公碑は５１３基に

大田町　石賀　了

当協会が今年度、ＮＰＯ法人石見銀山協働会議の助成を受けて行った「芋代官・井戸平左衛門頌徳碑調査事業」が終了した。

この事業は井戸公碑があるかないかを郵便で照会するもので、中国５県の市町村教育委員会（以下「教委」）、島根県内の神社、寺院を対象とした。届いた照会状は１３９４件。内訳は教委１０６件、神社３６６件、寺院９２２件で、このうち回答をいただいたのは教委84件（79・25％）、神社１７８件（48・63％）、寺院３９９件（43・28％）。全体では、６６１件、47・42％という高い回答率となった。

調査を始める前は、突然の郵便で「井戸公碑ありますか」との質問に、２００件も回答をいただければ大成功と考えていたので、大きなうれしい誤算となった。回答率が高かったのは、質問の内容が井戸公碑についてだったためと思われ、各地域で井戸公碑が特別な存在として認知されていることがわかり、あらためて井戸さんの偉大さを感じた。

回答は当然のことながら、こちらから送った市町村別の一覧表以外には「井戸公碑はない」というものがほとんどだったが、そんな中、始める前は２基でも３基でもあれば幸いと思っていた、新たな碑の報告が27件もあった（松江市５基、江津市４基、浜田市14基、益田市２基、川本町１基、美郷町１基）。これには大いに喜び、数基は早速調査に出かけた（本稿32号、33号で紹介）。

逆に、「一覧表にはあるが現在は存在しない」という回答もいくつかあったので、この際、存在しない碑や、井戸公碑でないものを除外することにした。これらは、大田市の井戸神社の恒松隆慶碑、松浦屋与兵衛碑、江津市の青木秀清碑など。この方々は井戸神社の再建や、サツマイモの増産に力を尽くした方々だ。宮本豊さんはこれらの碑も井戸公碑の中に含めておられた。

また、水害や倒壊などで現在は存在していない碑も外すことにした。この結果、調査前は４９３基だった井戸公碑は20基増の５１３基となり、残念ながら大田市内ではこれまで１００と数えていた碑は３基減って97基になった。ただ、この５１３という数も、今後の現地調査の結果で増えたり減ったりするだろう。

それにしても、照会事業で得られた成果は期待を大きく上回るもので、各市町に、報告をいただいたたくさんの「協力者」ができたことが最大の喜びだった。これまでは、見ず知らずの人間が「あのー」といって尋ね歩いていたのが、これからは「昨年お世話になった大田市文化協会です」と前段の説明なしで質問に入ることができる。

４月以降に現地調査を始めることにしている。大田市の97基はすでに調査を終えているので、残るは約４００基。決して少ない数ではないが、これからは協力者の助力をいただけると思うので、できるだけ短い期間に調査を進めていきたい。

全国的な新型コロナの収束はまだ見えないが、そんな中でも作業ができる井戸公碑調査。４月以降を楽しみにしている。

▷昭和12年に井戸公碑を建てた婦人会の皆さんには、サツマイモで命をつなぐことができたという大きな感謝の気持ちがあったに違いありません。

昨年11月13日、念願だった益田市の高島に渡って井戸公碑を調査してきました。知人からの情報で、きれんげ122号（平成30年７月）で紹介したときには、浜田市の斯波健太郎さんの著作物から写真を引用させていただきました。

この日は釣り用の渡船に乗せてもらって上陸。益田市の沖合約12㌔に浮かぶこの島は、昭和50年に全住民が益田市に集団移住して現在は無人島ですが、船着場のすぐ近くには建物跡など生活の痕跡が数多く残っていました。

碑は島の中央部にある灯台に向かう道沿いの少し開けた場所にあり、集落のすぐ後ろに当たる場所。道以外は人が手入れしているはずはないのですが、碑の周りだけは草も生えておらず、きれいな状態で残っています。

コンクリート製の台の上に立つ碑は高さ77㌢の磨いてない御影石で、前面には「井戸正明君之碑」、裏面には「昭和十二年二月十一日／髙島婦人會建之」の文字が彫ってあり、はっきりと読むことができました。

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて㉟

松江市の現地調査で38基を確認

大田町　石賀　了

昨年度の郵便による井戸公碑の照会事業に続き、当協会では今年度から現地調査を進めている。今年度は、照会事業で未発見の碑の報告が多く寄せられた松江市、益田市、浜田市の3市とし、5月までに松江市を4回訪問して、すべての碑の調査を終えた。

松江市からは新たに5基の報告があり、逆に「今はもうない」との報告も2基あったので、増減を確かめる意味でも真っ先に松江市に出かけることにした。

美保関町、島根町から地図と写真入りの情報も寄せられており、これも松江市を最初の調査地にした大きな理由だ。地元の方の情報は大きな力になる。

八束町（大根島）の8基は、地元の方の案内は受けず、大田市川合町の故宮本豊さんの調査資料にある付近見取図を頼りに歩いたのだが、8基とも海岸沿いにあって「お堂」の前か横にあるという特徴があったので、1日で全部を調査することができた。

美保関町では、まず、宮本資料を頼りに歩いたところ、1日で6基は調査できたものの、かなり時間がかかった。そこで、昨年度の調査で、お寺に代わって回答していただいた同町森山の永田公夫さんに電話したところ案内を快く受けていただくことができた。永田さんのおかげで、同町の残りの石碑は1日で調査できた。ただ、宮本さんが調査された昭和後期には存在していた（倒れていたが）千酌の石碑はすでに存在していなかった。

同じように、島根町でも昨年度の調査で写真と地図を送っていただいた同町の宮司、金津一男さんに6基を案内していただくことができ、これは半日で調査が終わった。ただ、ここでも、大芦地区の楡木にあった碑が確認できなかったため、島根公民館の田中豊館長さんに現地までご案内いただき、存在しないことを確認した。

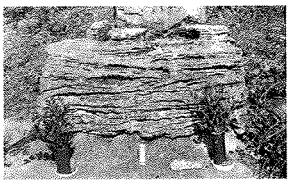
このように、地元の事情に詳しい方の案内をいただきながら、松江市の38基すべての調査を終えることができた。松江市の井戸公碑は旧松江市に4基、鹿島町に1基、島根町に6基、美保関町に19基、八束町に8基となった。旧市街地と南部には井戸公碑はなく、すべて島根半島とその近くにある。

松江市の碑の特徴は、美保関町、島根町、八束町ではすべての碑が非常に近距離に立っていること。美保関町では島根半島をぐるりと、中海側にも日本海側にも建てられているが、中海側では直線距離で平均約2・5キロに1基、日本海側では約1・5キロに1基という近さにあり、最も近接しているのは日本海側の北浦地区と稲積地区の碑が約700メートルの近さにある。同じように島根町では約1キロおきに立っており、最も近いのは多古地区の多古と沖泊の約400メートルの近さだ。この傾向は八束町も同様で、江島を含む大根島の周囲に8基の碑が約1キロおきにあり、最も近いのは寺津地区と亀尻地区で約350メートルの近さ。だからといって、井戸公碑が現在の住民の皆さんに親しまれているというわけではないが、建てられた時代には近隣の小さな集落ごとに競うように建てられた様子がうかがえる。

また八束町、美保関町を中心に、大根島や近くの海で採取された「大根島玄武岩」で建てられた碑が多い。この石は小さな穴がたくさんある硬い石で、表面が粗くて小さな文字が彫れず、石工さんが苦労したという。

台石にはミルフィーユのように岩が縞模様になった「森山石」が多く使われており、火山島の大根島周辺ならではの石碑が多いのが特徴だ（「大根島玄武岩」の情報は八束町の火山洞窟学会会員、門脇和也さんに教えていただいた）。

▷美保関町片江　長寿寺境内の井戸公碑。台石はお椀のような形の自然石で、上部に小さな石がびっしり埋まっている



▷美保関町長浜の井戸公碑の台石。ミルフィーユのような縞模様が美しい「森山石」

△島根町野波　ＪＡ野波店裏の広い交差点に六地蔵と並んで立つ井戸公碑

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて㊱

益田市では5基増えて20基か

大田町　石賀　了

昨年度の井戸公碑の照会事業を検証するため今年度から始めている現地調査。これまでに松江市、益田市を終えて、現在浜田市の調査を進めている。

益田市では、もともと宮本豊さん（大田市川合町、故人）の調査では15基だったが、その後個人的に情報をいただいて2基増え、17基の状態で照会事業を始めた。昨年度の調査で、益田市教育委員会の職員さんのご尽力でさらに3基増えて、現在20基（旧益田市9、美都町11）にもなっている。このうち3基はまだ未調査のままで、冬場にもう一度挑戦してみようと思っている。

△益田市金山町宇治の碑。写真右側のような竹や木に覆われていたが草刈りですっきり見えるように

益田市の調査でも印象的なことがいくつかあった。まず一つ目は高島の碑を調査できたこと（きれんげ第130号で紹介）。もう一つは、金山町宇治にある井戸公碑で、最初に調査に出かけたときは近くまで行ったものの、草木を分けながらあるはずの場所を何度行き来しても発見できなかった。そのことを教委の職員さんに話したところ、地元の皆さんにお願いされ、碑の周囲の広い範囲をきれいに草刈りしていただいて、あざやかに見えるようにしていただいた。

この碑は文字は彫ってないが160チンもある大きな碑なので、多少草に覆われていても見つけられそうなものだが、最初の調査時にはどうしても発見できなかった。それだけに出会えたときは本当にうれしく、立ち会っていただいた地元の方に感謝して調査をした。

もう1基、同じような出来事があった。6月10日、美都町の調査に出かけたとき、東仙道の旧JA事務所の前にある碑を訪ねると、うっそうと木が茂っていて何も見えない。隣の郵便局で尋ねても「知らない」と言う。それでもと、茂みの中に目を凝らすと、碑の説明板の一部が見え、その奥に井戸公碑があるのが見えた。しかし、とても写真を撮ったり、寸法を測ったりできる状態ではなかったため、冬場に再度訪れて、最低限の手入れをして調査することにした。

▷茂った庭木に埋もれていた美都町東仙道の碑（上）。庭木を伐採するなど、石庭の趣に（下）。白枠内が井戸正朋之碑とその前の説明板

郵便局の職員さんが「公民館の近くにあるのでは」と言われたので、近くの東仙道公民館を訪ねると、野村達也館長さんが「JAの前にあるのがそれです。前に一度整備したのですが、見えなくなっていて申し訳ない」と言われる。冬場に枝打ちをさせていただくことを伝えて、ほかの碑の調査に移動したのだが、なんと20日も経たないうちに手紙が届き「芋塚を整備した」とある。添付されていた写真では10日に見た木がすっかり伐採されて、説明板と井戸公碑が石庭に鎮座しているのが見える。

これには驚いて、早速7月1日に出かけて撮ったのが上の写真。こんなにきれいにしてもらって、さぞかし碑もすっきりしたことだろうと感慨深く調査させてもらった。お礼に公民館に行くと「ちゃんとJAの許可を得て整備しました」とのこと。こんな親切に益田市で2度も出会えて、とても幸せな気持ちにさせてもらった。

このように、現地調査は地元の皆さんの献身的なご協力をいただきながら進めている。各地でさまざまなご親切に出会えること、これもきっと井戸さんの遺徳なのだろう。

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて㊲

浜田市は大幅に増えて１７０基以上か

大田町　石賀　了

井戸公碑の現地調査を、松江市、益田市に続き浜田市で進めている。まず調査したのは三隅町。まちづくりセンターで紹介していただいた方を頼って調査を進めた。

調査開始前に三隅町で確認していた井戸公碑は19基だったが、それ以上の数の報告があったので、現地で確認することにし、最初にお世話になったのが、三隅町三隅の安井好裕さん。

名前を聞いて「もしや」と思い、ご本人に確かめたところ、明治時代に仁摩町の産業、教育に大きな貢献をされ、井戸神社の創建にも尽力された仁摩町大国の安井好尚さんのご血縁で、好尚さんは曽祖父の兄とのこと。

安井さんには三隅地区以外も広く調べていただいた。現地調査では、私の車に同乗して道案内していただいて順調に調査が進んだ。場所が不明なときは日を改めることもあった。写真上はそうした1基で、その場所に詳しい田城謙二郎さん（三隅）の案内をいただいた。田城さんは「郷土石見第１１６号（２０２１年６月）」に「芋塚さんの建立」という記事を投稿されている。

この碑は白砂の東平原という地区にあり、現在は周囲に家はなく訪れる人もない。舗装した道路から山道を歩くこと約20分の斜面の脇に建っている。石碑のすぐ近くには神社も建っていたという。

さらに、安井さんには同じく白砂の今浦という海辺の集落にある井戸公碑も案内していただいた。この碑は、今浦と地区の中心部をつなぐ道路沿いにあるが、その後に迂回する舗装路ができたためにだれも通らなくなった。

石碑には正面に大きく「井戸明府」とあり、その右に「明治十七年九月発起」左に「昭和六年八月十四日／今浦区」とある。発起から47年を経てやっと思いが結実して完成した碑だが、今では訪れる人もない。今回の調査では、安井さんのご友人に事前に周囲を整備していただいた。

さて、三隅町でもう一人お世話になったのが、井野地区の山本兼文さん。現在井野連合自治会長で、故郷を愛し、井野のことをだれよりもよくご存じだ。井野地区の16基の井戸公碑は、ほとんど山本さんからの情報提供で明らかになったものだ。

現在は近くに家がなくなって道路もなく、車では行けない場所にあるものが多いので、山本さんの案内なしにはたどり着けなかっただろう。

そのうちの一つに井野地区の上大口という集落の石碑があるが、この集落にはかつて9世帯の皆さんが暮らし、地区の中心部にある学校まで山道を越えて約3キロ、毎日徒歩で通学した。現在は無人となり、出身者も長く訪れたことがないので、井戸公碑を見学がてら上大口集落まで探検しようと、昨年11月に山本さんが計画し、上大口出身者など14人が参加、私たちも同行した。山道はかなり厳しかったが、出身の皆さんは口々に懐かしみ、「通学がつらいと思ったことはなかった」と述懐されていた。

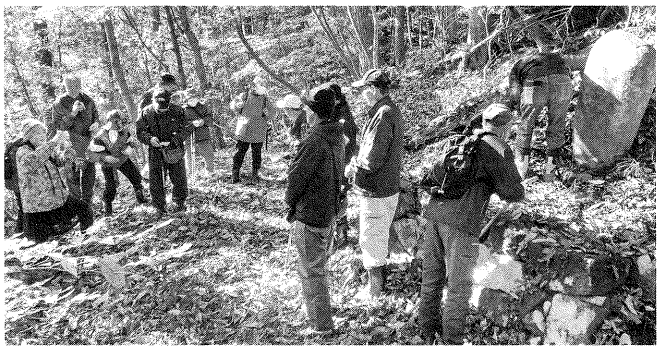
今は無人となった集落から、山道に差しかかる辻の広場に、井戸公碑だけが残っている。

三隅町でお世話になった両氏の紹介による井戸公碑は38基。調査開始前から倍増した。

同じく浜田市金城町でも14基増えている。調査開始前の浜田市の総数は１３８基だったから、2町の増加数を加えると１７０基を超えることになる。現在旧浜田市の調査を進めているが、市全体を終えると全部で何基になるのか楽しみにしている。

▷東平原の井戸公碑。文字は何も彫ってない。

▷今浦の「井戸明府」碑


△地元の皆さんと訪ねた上大口の「泰雲院殿之墓」碑（右端）

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて㊳

浜田市１７３基　調査完了の奇跡

大田町　石賀　了

大田市と浜田市の井戸公碑の比較

市	数	10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 110 120 130 140 150 160 170
大田市	97	旧大田市66　温泉津町26　仁摩町5
浜田市	173	旧浜田市58　金城町35　旭町17　弥栄町25　三隅町38

前号で浜田市の現地調査の途中経過を報告したが、年度を越えてやっと５月に完了することができ、浜田市の井戸公碑の総数は現時点で１７３基となった。

三隅町では特にお二人のお世話になり、金城町と旭町ではまちづくりセンターの皆さんにお世話になって、周辺部の調査は順調に進んだが、難航したのは旧浜田市だった。前号（３月）で「市全体の調査を終えると何基になるのか楽しみにしている」と書いたが、実は完全に調査が終えられる自信はなかった。益田市や浜田市の各町のように頼って行く先がないにも関わらず、場所が特定できない頌徳碑が19基も残っていたからだ。

現在進めている調査では石碑の場所の緯度経度を調べているので今後は場所を容易に特定できるが、以前の調査資料ではそうはいかず、町名までしか分からなかったり、付近見取り図はあっても、国道や目標となる公共の建物などがない場所では、とても石碑までたどり着けないのではないかと思っていた。

悩みながら調査を進めていると、ある場所で道を尋ねたご夫婦が、「浜田市の歴史に詳しい人」と、浜田市美川まちづくりセンター西分館（田橋町）のお世話をしておられる石津公雄さんを紹介してくださった。電話で連絡を取り、数日後にお会いして協力をお願いすると「調べてみる」と言っていただけた。

念のため、浜田市教育委員会文化スポーツ課を訪ねて依頼すると、若い男性職員さんが「かなり分かると思います」と言ってくれ、大きな手応えを感じて帰った。この職員さんはすぐさま熱心に調べてくれ、翌日以降、碑の所在地を地図に示したデータを続々送っていただき、10基以上の碑と、新規の情報も２基分送ってもらうことができた。

これでほとんど調査ができると喜んでいると、石津さんから電話があり、「全部分かった。案内するのでお出かけください」とのこと。お言葉に甘えて５月20日に浜田市を訪問。石津さんの車に先導してもらいながら、１日で16基というハイペースで調査をすることができた。

この中には新規のものも５基あり、浜田市教委分と合わせて新規情報は７基となった。こちらが渡した資料の中には、すでになくなっているものが１基、旧浜田市内で移動しているものが１基、三隅町に移動したものが１基あり、お二人からの情報で、合計24基の調査ができ、旧浜田市の井戸公碑は58基であること、周辺の町を合わせると浜田市全体では１７３基あることが判明し、数日かけてすべての碑を調査し、浜田市の調査が完了した。

19基を残して自信をなくしていたことを思い返すと、お二人の親切に出会えたのは「奇跡」としか思えない。

調査が終わって石津さんにお礼を言うと「全部を知っていたわけではないが、浜田のことを市外の人に尋ねられて『分からない』とは答えたくなかったので、いろいろと手を尽くした。役に立ててよかった」と言っていただいたのがありがたかった。

全体で約５３０基の井戸公碑の現地調査は、このように、その土地土地の親切な皆さんのお力添えで進んでいる。今年度中にはすべての碑の調査を終えたいと考えている。

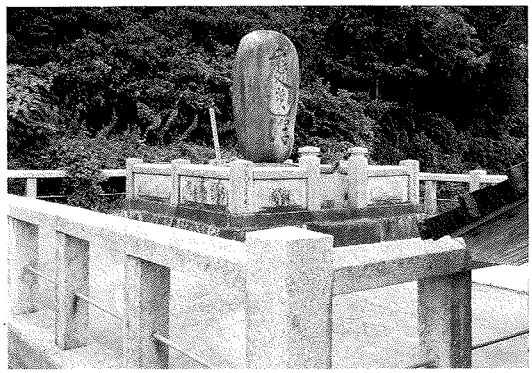
▷「石見路にすたれゆくもの甘藷供養　月洲」と彫られ、元高野町にあった美川句会の大崎亦一さんの句碑。なくなったと思っていたが、浜田道建設の際に撤去され、現在は三隅町白砂の東平原にある。

△三階町にある碑。碑銘はないが、近くの人によると、昔はこの碑の前でにぎやかに飲み食いをしていたという。おそらく芋法事の後の慰労会のことだろう。
写真の２基とも石津さんに紹介してもらったもの。

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて㊴

近年再建された碑が多い江津市

大田町　石賀　了



令和２年度から当協会が続けている井戸平左衛門公の頌徳碑調査。今年度は、美郷町25基と川本町31基を完了し、現在江津市の現地調査を進めている。土地勘がなく難航が予想されたが、江津市教育委員会、各地域のコミュニティ交流センターの皆さんの絶大なご協力で順調に進み、９月末現在で残り数基というところまで進んでいる。

旧江津市で特徴的なのは、平成以降に再建された頌徳碑が６基もあることだ。

▷上の段右から後地町藪、清見町、和木町の井戸公碑。左側が上から嘉久志町、黒松町、後地町尾浜の碑

建立後百年前後の年数を経ている井戸公碑のうち、軟らかい石を墓石型に加工したものは、かなり傷んでいるものが多い。雨、雪、苔などの厳しい自然条件の下で、全体がやせて文字が読めなくなったり、剥落したり、割れたりしているものも多くみられ、存続が危ぶまれるものも少なくない。

しかし、だからといって、なかなか再建にはつながらない。その大きな理由は、サツマイモを米の代わりに食べて親から子へ、子から孫へ命をつないだ時代とは違い、今ではなくてはならない野菜ではないからだ。

現地調査を進める中で、昭和50年代にはあったのに今ではなくなって、再建されないままの碑も各地にいくつかあり、その都度、現実を受け入れながらも残念な気持ちになっている。

ところが、旧江津市では、調査を始めたところ立て続けに再建された碑があったのでとても驚き、喜んだ。調査順で、まず、黒松町の碑が平成10年（１９９８）に再建されていたのに続き、後地町尾浜が平成４年、後地町藪が平成15年に再建されていた。

ほかに、以前この連載㉛（２０２０・３）で紹介した嘉久志町の岩根神社前の「嘉恵碑」が令和元年の再建だし、⑥（２０１０・２）で紹介した和木町向の浜の「慶遺澤」碑も、平成24年に玉垣と石垣が再整備された。また、清見町の碑も平成９年に再建されているので、合計６基が再建、再整備されたことになる。

再建が多い理由はよくわからないが、共通していえるのは、前碑が軟らかい石で墓石型だったため傷みが激しかったのだろうと思われ、新碑はすべて堅い自然石製だ。そしてたいていの碑が、先輩に敬意を表して前碑と同じ文字を彫り、追加として再建した関係者の名前や再建時期を彫っている（後地町藪の前碑は水害で土砂とともに流されてしまったため刻字内容を一新）。

また、嘉久志町と和木町の碑の横には、解説板が新設されていて、井戸さんの功績を紹介するとともに、碑が建てられたことの意味を分かりやすく解説しているのもうれしいことだ。

江津市の井戸公碑は合計80基になる予定で、この数は市域の一部が石見銀山領だったということもあって、浜田市、大田市に次いで３番目に多い。

残り数基の調査でどんな碑と出会えるのか、楽しみにしている。

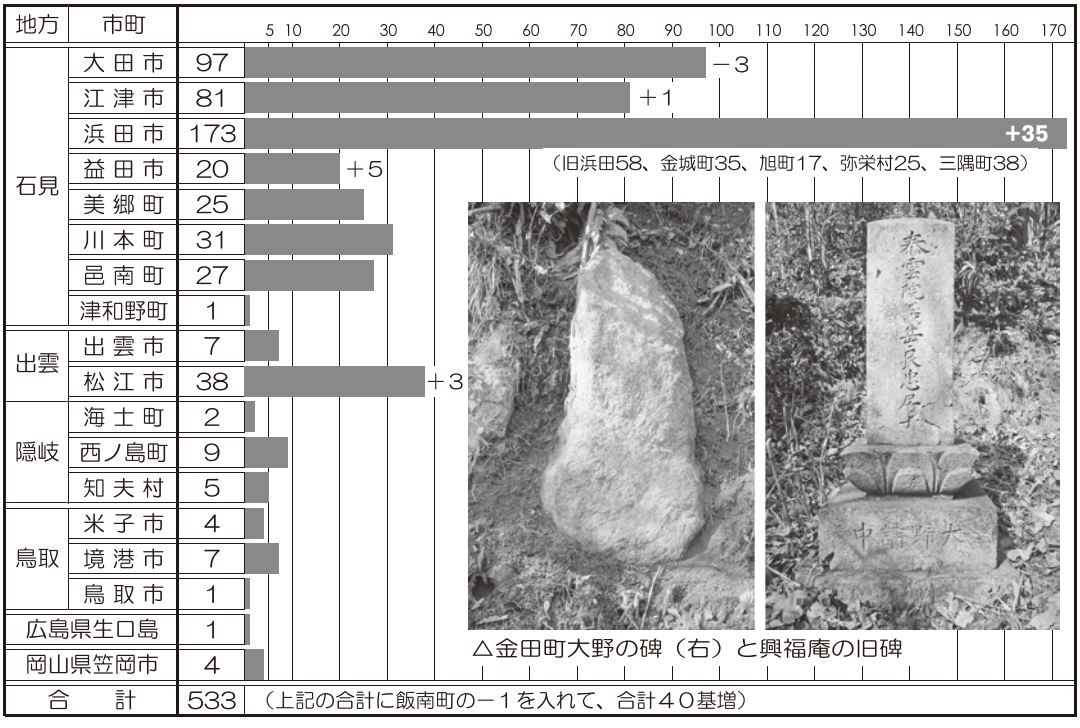
井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて㊵

井戸公碑は総合計５３３基に

大田町　石賀　了

井戸公碑の市町村別の分布

2023年１月３１日現在



△金田町大野の碑（右）と興福庵の旧碑

当協会が、石見銀山基金の助成を受けて進めてきた井戸公碑の現地調査が完了し、総数は５３３基になった（グラフ参照）。

令和２年度からの３年間で行った照会調査と現地調査の結果、調査を始める前の４９３基から40基も増えた（市町村ごとの増減はグラフに表示）。

現地調査は３年度に松江市、益田市、浜田市を、今年度はそれ以外の市町村(県外を含む)を調査。最後に調査したのは江津市で、旧江津市の60基に苦戦した。

江津市教育委員会（以下「教委」）と、各地域のコミュニティ交流センターなどのご協力で途中までは順調に進んだが、あと数基というところから進みにくくなった。草が多くて冬場でないと行きにくい場所が多かったこともある。

車が通る道沿いに碑があればいいのだが、車を止めてから山道を歩くところもある。車も４輪駆動でないと難しいので、車を借りたり、持っている人に同行をお願いしたりした。

◁倒れていた興福庵の新碑

最後の３基はとてもドラマチックな発見だった。

まず金田町大野は現在無人になった地域で、４駆の軽トラックで林道を途中まで上がって、後は徒歩で進む。１回目は往復２キロ歩いたが結局見つけられず、２回目は「わかると思う」という方と教委の職員さんと５人で上がったが、どうやら違う場所を探していたようで見つからなかった。私たちはあきらめて帰ったところ、何と職員さんが再挑戦してくれて、そして「発見！」の電話が。これには大感謝した。車を止めてから約７００メートル奥の林道沿いだった。

もう２基は跡市町の興福庵というお寺にある新旧の２基。

最初の問題は、そのお寺が昭和の時代に建物が崩れ落ちて、参道も分からなくなっていたこと。「山をかき分けてでも行きます」と言っていたら、跡市町の地域コミュニティ交流センターのセンター長さんと地元の方が、草刈りして別の近道をつけてくださった。そしてやっと行った寺の境内跡に、２メートルの高さの新碑は倒れた状態で見つかった。

最後は興福庵の旧碑。これは参道のどこかにあるのだが、参道がもうないので見当がつかなかった。建物跡から道らしきものを探し、行く手をさえぎる笹や草を刈りながら右に左に降りていくと、それらしいものを発見！この碑には文字が彫ってないので、資料写真と見比べて確定した。

その３基を発見したのが１月12日。それ以降は全体の情報をまとめる編集作業を進めており、３月中には報告書を印刷、４月中には希望される方に販売できる冊子を発行できると思っている。

別の稿でご案内もしているので、ご期待の上、ぜひお買い求めください。